

以下に収録された諸史料について

中西裕二・井上隆明

本論の後に収録されている諸史料は、そのほとんどが中西論文と白川論文の内容とに関わるものである。その内容について、以下で簡単に紹介する。

「美奈宜神社御粥」（慶応三年〔一八六七〕～明治二三年〔一八九〇〕）

本史料は平成十五年（二〇〇三）頃、甘木市林田の美奈宜神社において宮司の内藤主税氏によって発見された、慶応三年以降に美奈宜神社で行われた粥占の記録である。形態は縦帳であるが、絵図の綴じ方などからみて、後年になって粥占史料のみを集めて綴じたものであることはほぼ間違いない。

中西論文で述べられている通り、現在美奈宜神社では粥占は行われていないが、本史料からは、幕末期にはこの占いが行われていたことがわかる。現在、近世期からの粥占の記録が残されている地区は、管見の限りでは浮羽町田籠の諏訪神社粥占（福岡県より民俗文化財指定）、朝倉町志波の宝満宮（現在は散逸）、そしてこの「美奈宜神社御粥」のみである。現在確認できる唯一の粥占史料である諏訪神社粥占史料

と比較すると、記録年度が少なく断片的である点は否めないものの、儀礼執行者名の記載があること、占いの対象地域が筑前国内に広く亘っていることなど、現在の近隣地域の粥占との共通点が多くかつ詳細に記録されている点で、粥占の性格を窺い知ることのできる貴重な史料であると言える。

「淀川組 神社仏閣書上」（天保十一年〔一八四〇〕）

本史料は、中津藩領の深江村（現、福岡県糸島郡二丈町深江とその近辺）淀川組の神社仏閣に関する書上である。形態は縦帳。前原市川付の川上家の川上文書中にあったが、二丈町において平成十四年（二〇〇二）から同十六年度に行われた町誌編纂の過程でその内容が明らかになった。白川論文作成に当たり本史料は非常に重要な位置を占めている。

本史料の特徴は、記述が詳細にわたりかつ寺社に関する伝承も多く記されている点にある。通常では、寺社書上類は村内の寺社に関する基本台帳といったような性格であり、記述者も自分の村の「当たり前

を参照していただきたい。

福井神楽は本号所収の論文とは直接関係してこないが、白川による豊前神楽の論考（二〇〇六）、白川・中西による福井神楽の位置づけに関する論考（二〇〇五）はともに、本神楽の分析で神仏習合を旨とする寺社勢力の存在と民俗文化の関連性、そして祈禱儀礼としての神楽という位置づけを説いており、その意味でも福井神楽の分析は本号所収の白川論文・中西論文の主旨と同一線上にある。また本神楽の祭文と上記の論考を併せて読むことで、白川論文の論旨はより説得的になると考えられることから、本号に史料として掲載することとした。

「当年漸十一二相成候」者であり、職務を「未タ不相勤ゆへ」、川付村の川上六右衛門、庄崎弥七郎の兩人が後見として本史料の作成を代行したことが記されている。また、史料中には「御役所ニ上ル」とあり、本史料の正本が中津藩側に提出する目的で作成されたことがわかる。これらのことから、兩人は隣村であっても詳しくは知らない地域の書上を詳細に作成するため、一から淀川組内の実地検分、聞き取りを行ったと推測される。それがこの文書の記述の詳細さにつながったと思われる。文化人類学のフィールドワークと記述の問題を考える上でも、興味深い史料であると言えるだろう。

「大神楽根帳」（作成年代不明）

本史料は、二丈町福井の福井白山神社が所蔵する福井神楽の祭文を記したものである。形態は竖帳。年記がないため成立年代はわからないが、近世期のものであると推察される。二丈町福井は本号収録の白川論文で取り上げられている二丈町淀川にほど近い位置にある。

二丈町福井の福井白山神社では毎年五月の第二日曜日に通称「福井神楽」が行われている。神楽の形式は福岡県豊前市近辺の通称「豊前神楽」と類似しているが、豊前神楽では演舞中に本来唱えられる祭文が消失し、その概要は近世末の文書でのみ確認されるのに対し、福井神楽ではこの「大神楽根帳」を元に現在でも演舞中に祭文が唱えられている。福井神楽の全容に関しては、二丈町教育委員会編（二〇〇五）

「宇美八幡宮 雉琴神社 天降神社 熊野神社 福岡縣神社誌料調書 合綴」（大正四年（一九一五））

本史料は、福岡県前原市川付の宇美八幡宮に所蔵されている。宇美八幡宮宮司の武内家は、本号所収の中西論文・白川論文において登場する前原市白糸の寒みそぎが行われる熊野神社の宮司も兼ねており、史料中にも同行事に関し詳細な記述がみられる。宇美八幡宮の社史については本史料を参照されたい。

この史料を書き残した武内寅男は宇美八幡宮宮司を務め、同宮に伝存していた文書の整理を積極的に行っていたようである。本史料はそのタイトルからわかるように、おそらくは、『福岡縣神社誌』（大日本神祇會福岡縣支部（一九四四―五六）編纂の基礎史料として神社庁あるいは行政機関に提出された報告書の写ではないかと推測される。その記述は詳細にわたっており、とくに武内家が神宮寺の社僧（寶藏

坊)として長く神社祭祀に携わっていたという記事は、次の二つの点で注目されるだろう。

第一は、白川論文で取り上げられている、前原市に隣接した二丈町深江の深江神社の祭祀形態、すなわち真言宗の僧侶秀覚院が神社の宮司を務めるという形態が宇美八幡宮とほぼ同一である点、そして両社が怡土郡を代表する古社に含まれる点から、両部神道による神社祭祀がこの地方では例外的というよりむしろ一般的であったことが窺える点である。

第二は、武内寅男が自らの坊号を示しながら宮司としての正統性を主張しているという点である。本史料が執筆された時期は、明治維新後既に半世紀が経過し、神仏分離と国家神道が民衆の隅々まで浸透していたと考えられる。維新後、国家神道のもとで神職資格を得るために、社僧の多くは僧籍を離れ自らの由緒を隠しながら宮司・神主としての新たな道を模索することになった。従って、その過去を自ら語ることは、当時の神道政策という文脈上不利にしか働かず、当時の多くの宮司・神主は自らの過去を封印したきらいがある。しかし、武内の史料を読む限り、むしろその歴史にアイデンティティを置き、他の宮司・神主とは別格の、歴史を有する神職である点を主張しているように感じられる。これは、当時の社会的文脈と併せて考えると非常に興味深い記述である。

武内寅男は本史料の他「長野庄八幡宮及び長嶽山神宮寺古文書古記録調書」(大正六年)、「福岡縣糸島郡長糸村鎮座郷社宇美八幡宮御由緒及所蔵古文書摘録」(大正六年)を著した。その多くは中世文書の

以下に収録された諸史料について(中西・井上)

写であるが、残念なことに大部分は散逸してしまっている。しかし幸いなことに、明治二十年(一八八七)に久米邦武が宇美八幡宮で調査した際に作成したと思われる影写本二十点が東京大学史料編纂所に所蔵されている(うち一点は偽文書、十一点は偽文書カ)。「長野庄八幡宮及び長嶽山神宮寺古文書古記録調書」の冒頭には、久米邦武の他、同宮所蔵の文書を調査した研究者の名が列記されており、同宮に対する歴史的再評価への期待が窺える。同時に、「福岡縣糸島郡長糸村鎮座郷社宇美八幡宮御由緒及所蔵古文書摘録」の冒頭「宇美八幡宮御由緒及沿革概説」(内容は本号所収史料とほぼ同一)では、「長野郷ノ名倭名抄ニ見ユ最古ノ地ナリ而シテ此靈蹟未ダ世ニ顕彰セラレズ案ズルニ地ノ僻陬ナルハ千古ノ遺跡ヲ藏スルニ易シト雖遂ニ時人ノ周知スル處トナラズ識者偶是ヲ筆ニスルモ足跡ヲ此土ニ印セズ特ニ封建ノ世中津領タリシハ續風土記並ニ拾遺ノ著者ヲシテ其概ママ博ナル研鑽ヲ得ゲタルヲ恨ミトス」とあり、「歴史の渴望」とでも言うべき著者の思いを垣間見ることができる。

「糸島郡二丈町一貴山・徳田家所蔵文書目録」(中西裕二・井上隆明編)

本文書目録は、淀川組一貴山村(現、福岡県糸島郡二丈町一貴山)の庄屋であった徳田家に伝存した文書を整理したものである(徳田家は現在福岡市内に転出)。徳田家は江戸初期に一貴山村が唐津藩領であった頃、唐津藩の命で肥前国東松浦郡千々賀村(現、唐津市千々賀)より当地に遣わされた庄屋で、のちに一貴山村が中津藩領になつてか

らも代々庄屋を務めていた。そのため一貴山では、徳田家を称して「入庄屋」とも呼ぶことがある。

一貴山村は、二丈町における寺社勢力の痕跡を最も留めている村と言える。村の草分け十二軒には八つの坊名がつけられ、この八坊が祭祀の重要な役割を担っていた。徳田家は政所坊という坊名である。その詳細については中西（二〇〇五）を参照していただきたい。

徳田家所蔵文書の多くは、一九世紀中頃に庄屋を務めた徳田信敬（一八一四—一八八二）が収集している。彼は近隣の知識人との親交が深かったことが本目録中の史料群からも窺え、当時の上層農民の知的傾向を知る上でも価値があるであろう。そして同時に、庄屋層がいわばナショナルな枠組みと接合するような知識を欲していた頃、一方で一貴山村の村人の中には天台衆徒の末裔というアイデンティティが根強く残されていた点が、「淀川組 神社仏閣書上」から読みとることができ。これは、民俗文化の形成を考える上で非常に興味深い状況であると言えるが、本号ではそれを詳細に論じる余裕がない。何らかの機会に、別稿でその点について考察を深めたいと思う。

なお、目録を除き、史料の翻刻に際しては以下の凡例に従っている。

一、原史料中で抹消された文字が判読可能な場合は左傍に、を付して原文を残し、訂正された文字がある場合には右傍に付した。

一、校訂者が加えた傍註にはすべて「」を施した。なお、底本に傍註してあるものは、底本通りとした。

参考文献

白川琢磨

二〇〇六（予定）「〈落差〉を解く―豊前神楽を例として―」『国立歴史民俗博物館研究報告』一三二集。

白川琢磨・中西裕二

二〇〇五「福井白山神社の諸史料と神楽の位置づけ」『福井神楽』（二丈町民俗文化財調査報告書 第3集、二丈町教育委員会編）四三—五〇頁、二丈町教育委員会。

中西裕二

二〇〇五「民俗」『二丈町誌 平成版』（二丈町誌編纂委員会編）六四三—七一六頁、二丈町。

二丈町教育委員会編

二〇〇五『福井神楽』（二丈町民俗文化財調査報告書 第3集）二丈町教育委員会。

大日本神祇會福岡縣支部編纂

一九四四—五六『福岡縣神社誌』